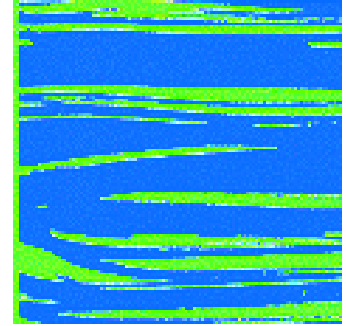


日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2008年 秋号 No. 52 (2008年12月8日 発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

学会賞(論文賞)の決定について	浅野俊夫・島宗理
自主シンポジウム報告 特別講座 障害児者包括支援に向けた国際連携(2) — 中国各地方における自閉症児教育施設の現状	望月昭
書評『インコのしつけ教室 応用行動分析学でインコと仲良く暮らす』(青木愛弓・著 誠文堂新光社)	中島定彦
連載: いま、こんな研究しています(7)	菅佐原洋
事務局より: 未納会費のご請求について	
編集後記	ニューズレター編集部

学会賞(論文賞)の決定について 研究教育推進委員会 浅野 俊夫・島宗 理

担当理事 浅野 俊夫・島宗 理

第4回(2008年度)日本行動分析学会学会賞(論文賞)につきましては、2008年9月30日から2008年10月30日まで、全会員による投票が行われ、11月15日の第5回常任理事会において開票した結果、奥田健次氏の「不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果 - トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム -」(『行動分析学研究』第20巻第1号掲載)が論文賞に選ばれましたので、ここにお知らせ申し上げます。

奥田氏の本論文は、

- 我が国の教育界におけるニーズに応える研

究であること。

- 多層ベースラインと基準変更法を組み合わせ、独立変数と従属変数の関係を明確に示していること。
- 用いられたトークン・エコノミー法の手続きは再現可能なものであり、他の研究者や実践家にとって有益であること。などの点で、Baer, Wolf, & Risley (1968, 1987) が示した応用行動分析学の研究の要件を満たした規範的な論文であることが評価されました。

なお、本学会賞(論文賞)の受賞式と受賞講演は、2009年度年次大会(筑波大学)において行われます。

自主シンポジウム報告 特別講座 障害児者包括支援に向けた国際連携（２）— 中国各地方における自閉症児教育施設の現状

立命館大学 望月昭

表記のシンポジウムが、行動分析学会の協賛のもと、去る 10 月 29 日に、立命館大学衣笠キャンパス学術館第 2 研究室で開かれました。2005 年の北京での国際行動分析学会以来、多くの自閉症児教育の関係者の方たちとご厚誼をいただいておりますが、以来、毎年、立命館大学の人間科学研究所を主催者として、中国の特殊教育関係の方々とは京都で研究会やシンポジウムを開いています。

昨年も、やはり行動分析学会の協賛で、「中国における障害児教育と障害者福祉の現状と展望」というタイトルで、北京師範大学、北京星星雨教育研究所など北京を中心とした諸施設からの講師をお招きして、中国における障害児教育についての現状報告を中心としたシンポジウムを開きました。

今年は、さらに中国の他の地方の自閉症教育施設の代表者の方々に、それぞれの地方での教育事情などについてお話いただきました。その上で、日本側からは、私が、「特別支援教育」という名称のもとでどのような方向で障害児者への支援が行われているかについて、行動分析学会でも実践賞をとった京都の「個別の包括支援プラン」の理念などを含め、就労支援を中心とした話題を提供させてもらいました。

北京での国際行動分析学会のおりにも話題になりましたが、中国においては、自閉症教育が、あたかも応用行動分析（ABA）の中心的（というか唯一の）テーマであるかのような状況とともに、あまりにも「治療モデル」あるいは「医療モデル的」な発想で実践や研究が行われているという印象を、これまで禁じえなかったのですが、今回の中国の方々の発表や私の発表への質問などから、必ずしもそうではないと認識を新たにしました。

具体的には、包括支援や特別支援教育の持つ地域の問題、あるいは環境設定の整備に関しても、その戦略のステップや具体的作業について、きわめて実践的な質問をいただきました。さらには、いわゆる治療的対応にしても、今回、中国側の発表者のみなさんが紹介してくれた映像などをみても、2005 年当時に見学させていただいた内容から、かなり進展されているようです。というか、これほどの施設が果たして日本にあるのか、というくらいの充実度があるようです。

以下に、中国側の参加者の方々のお名前と所属を紹介します。

蔡 艶春（廈門（アモイ）迦南自閉症教育培訓中心）

方 静（青島自閉症研究会 理事長）

張春華（青島自閉症研究会 研究部主任）

張建華（西安市碑林区拉拉手（ララソウ）特殊教育中心 理事長）

張涛（西安市碑林区拉拉手（ララソウ）特殊教育中心 主任）

蒋俐敏（上海徐 区星雨儿童康健院 院長）（はさんずいに□）

そして、昨年に引き続き、呂曉 さんが日本ツアーのコーディネートをしてくださいました（は丹にさん部（旁））。

来年からは、呂さんや今回のメインスポンサーである三谷学園の井上先生らによる JICA 事業のもとで、中国における自閉症のある個人へ包括支援についての実践がスタートします。そのタイミングにあわせ中国語の応用行動分析による障害児者支援のテキストの出版も日本行動分析学会の出版事業の一環として計画しております。会員の皆様にも、いろいろと協力をいただくことになると思いますのでその節はよろしく

お願いします。

ニューズレター編集環境の制約で、一部の文字

を印刷できませんでした (編集部)。

書評 『インコのしつけ教室 応用行動分析学でインコと仲良く暮らす』

関西学院大学 中島定彦

『インコのしつけ教室 応用行動分析学でインコと仲良く暮らす』

青木愛弓・著 誠文堂新光社

2008年10月 1600円(税別)

『コンパニオンバード』という「鳥たちと楽しく快適に暮らすための情報誌」がある。その創刊号からずっと、鳥のしつけと訓練について行動分析学の立場から解説した記事を連載しているのが、青木愛弓さんである。青木さんは、日本大学の大学院で河嶋孝先生から行動分析学を学び、それをインコの飼育に応用することを行ってきた。彼女はまた、『バードトレーニング』(<http://love.ap.teacup.com/bird/>) というウェブサイトでも行動分析学に基づいた鳥のしつけと訓練を紹介している。

本書はその彼女が出版した「インコのしつけ本」である。理論的に正確な知識が、現場でのコツとともに、一般の人々にわかりやすく紹介されている。口絵の写真もきれいだし、親しみやすいイラストで、随所に出てくる[Aどんな時に][B行動][C何が起こった?]の3つの箱の図が理解を助けている。ペット関連本ではメジャーな誠文堂新光社からの出版(なお、同社は『コンパニオンバード』誌の発行元でもある)だから、書店のペット関連書の棚に堂々と並ぶことだろう。

こうした形で一般の人々に行動分析学が普及

していくのはちょっと愉快だ。序章の「心理学の1つである行動分析学に基づいて」というくだりから、心理学に対する間違った先入観を打ち砕くことにも貢献するのではと期待する。実際、ドッグ・トレーナーや獣医師の間では、クリッカートレーニングや動物の問題行動治療の普及にともない、その背景にある行動分析学および行動理論全般の知識が広まり、心理学という言葉から連想されるイメージ(行動分析学の用語を使えば、イントラバーバル)が変わりつつある。

さて、本書にしたがってインコを訓練した飼い主はその成果に驚くだろう。そして、早晚、自分自身もインコに訓練されていることに気づくのではないだろうか。スキナーの高弟であったハーンスタインは、2羽のハトを用いて教育活動をデモンストレーションして見せ、教師ハトが生徒ハトの行動を制御すると同時に、生徒ハトも教師ハトの行動を制御していることを見事に示した(Herrnstein, 1964)。そこに行動分析学の真髄があると評者は思う。そうした真髄を伝える1つのメディアとして、本書の効果に大いに期待する。

Herrnstein, R. J. (1964). "Will". *Proceedings of the American Philosophical Society*, 108, 455-458.

連載: いま、こんな研究しています (7)
慶應義塾大学先導研究センター研究員 菅佐原洋

今回、「私のこんな研究」ということでテーマを頂き、「読み」「書き」の学習困難への支援と、コンピュータ支援指導の2つについて紹介させて頂きたいと思います。

現在、通常学級に在籍し、明確な診断の有無にかかわらず、読みや書きの学習に困難を示す子どもは全小中学生の2.5の割合、実は特別支援学校(旧、養護学校)や特別支援学級(旧、特殊学級)に在籍する子ども、約20万人よりも多い数字なのです。私自身、特別支援アドバイザーなる仕事に携わって幼稚園や小学校を訪問しますが、「授業中に座ってられない」や、「すぐに友達とトラブルになる」といった問題を示すとされる子どもを、よくよく行動観察や聴き取りをしてみると、実は読みや書きの問題から、授業について行けず、二次的な問題として問題行動を起こしているといった場合を数多く経験しています。

ここで対象となる「読み」と「書き」は、特定の刺激の元で生起する刺激-反応関係として捉えることができます。例えば、「文字や単語、文刺激」の元で生起する「音声表出反応」が、「読み(音読)」となるわけです。書く行動も、文字を刺激として生起する書字反応は、「視写(copying)」や「なぞり(tracing)」、音声刺激に対する書字反応であれば「聴写(dictation)」などとなるわけです。このように刺激-反応関係をして捉えた場合、(1)当該の反応が、適切な刺激性制御の元で生起するか、(2)反応型そのものが獲得されているかといったことが重要になります。

例えば、学校の先生から、「この子は、自分の名前は書けるけれども、名前に含まれる文字を個別に書くことができない。なぜか?」といった質問を受ける場合があります。その場合、そのお子さんは、「自分の名前全体」という刺激に対して「名前全部を書く」行動は獲得されているが、「個々の文字刺激」に対する「文字書字反応」が獲得されていないと捉えるわけです。このように、刺激-反応関係という観点から「読み」「書き」を捉えると一見不思議なこともうまく説明

がつくわけです。

すると臨床的な支援としては、適切な刺激-反応関係を形成することが目的となるわけですが、実際に全ての刺激-反応関係を教えることは困難です。単語ごとに音声刺激、文字刺激、絵刺激の全ての場面で指導しようとするれば、いくら時間があっても足りません。そこで重要になるのが、「刺激等価性(stimulus equivalence)」や「等価関係(equivalent relation)」と呼ばれる研究の枠組みです(Sidman, 2000)。例えば、子どもにある絵を見て対応する単語を選択する課題と、その単語に対応する音声を提示して、絵を選択する課題を指導すると、直接指導していないにも関わらず「単語を見て、音声を表出する反応」などが生起することが報告されています。このような、直接の訓練を経ずに生じる派生的な関係のことを、刺激等価性、または等価関係と呼びます。このような派生関係をうまく利用することで、全ての関係を指導しなくとも「読み」や「書き」を広げていくことができるのです。

実際に、Sugasawara and Yamamoto (2007a)では、絵を見て、ひらがなを順番に選択して単語を構成する構成反応見本合わせ課題(constructed-response matching-to-sample; CRMTS)を用いて、発達障害児に読みの指導を行っています。この課題では、ただ構成をするだけではなく、ひらがなを選択した際や正しく単語を構成した際に、その文字や単語に対応した音声はコンピュータから提示される手続きを取り入れています。つまり、一つの課題で、絵と単語と音声、ひらがなと音声の関係の訓練が含まれているわけです。実際にこの指導を行った2名の子どもでは、直接訓練を行っていない「ひらがなの読み(文字-音声表出反応)」が獲得されました。

このように「読み」「書き」の学習に対して、刺激等価性などの枠組みを用いた研究を行っているのですが、もう一つ大きな問題として、(2)の反応の問題があります。例えば、書字反応は、鉛筆を持つ、鉛筆を空間内に適切に移動する、適

度な力で紙に鉛筆の先を押しつける、といったいくつもの行動から成り立っています。しかし、発達障害児は、このような手先を細かく使う微細な運動に困難を示しやすいのです。例えば、LD児が「げんこつにぎり」や「鉤状にぎり」と呼ばれる特徴的な鉛筆の持ち方をすることがあります。これを鉛筆の持ち方の発達段階から見ると、それらの持ち方が1-3歳の時期に過渡的に見られる持ち方であることが分かります。つまり、鉛筆を持つという一見単純な運動にも発達の遅れが関わってくるのです。そのため、運動反応としての書字をどのように支援するかという問題も関わってくるわけです。

Sugasawara & Yamamoto (2008) では、漢字の読みはできるが、視写に困難を示す9歳の発達障害児1名に対し、CRMTS課題を用いた書字の介入研究を行っています。この研究では、提示された部首を組み合わせて、見本と同じ漢字を構成するCRMTS課題を用い、文字を「繰り返し正確に書くこと」ではなく、「繰り返し正確に構成すること」の集中指導を行っています。すると、直接指導をしていない漢字の視写に改善が示されただけでなく、訓練に使用した部首を組み合わせた未訓練の新規漢字の視写にも改善が見られました。このような結果は、漢字だけではなく拗音を含む単語の書字でも確認されています(菅佐原・阿部・山本, 2006)。

しかし書きには、正確性の問題だけではなく、速く書いたり、長い文章を書いたりするといった流暢性に問題を示す場合もあります。獲得された刺激-反応関係が、一定のスピード、一定の流暢性を持って行うことができるかどうか、学習達成に大きく関わってきます。もちろん、行動の流暢性や行動の高正反応率の確立が、読み書きに限定されず、全般的な学習の維持や般化に関わることについては、様々な研究がなされています (Johnson & Layng, 1996; Binder, 1999)。

また、「書き」の運動反応による負荷を最小限に抑えることで、流暢性を確保することを目的に、ワープロなどの選択反応を使用した書字指

導を行う場合もあります。実際に、Sugasawara & Yamamoto (2007b) では、学習障害児を含む発達障害児24名に対して、単語・単文の視写によるカナ入力のワープロ書字指導を行っています。「いす」や「ひも」などの2文字のひらがな単語の視写入力を中心とした課題を用い、入力にかかる時間が、直前の試行より短くなることを分化強化する手続きを用いました。その結果、平均10試行程度で入力時間が有意に速くなることや、音声刺激や絵刺激といった異なる刺激次元で提示しても入力速度が維持されること、「きのう、学校で野球をしました」などの短い文章の聴写においても、書字文字数が増加することが示されました。また、続けて行った単文視写入力訓練後には平均23試行という少ない訓練回数で、1分間の書字文字数が20文字以上になることもわかりました。

また、菅佐原(2006)では、ワープロの入力の流暢性訓練を受けた発達障害児6名を対象に、(1)子どもが興味を示しやすい複数のテーマから選択する機会を設定する、(2)作文中のよい表現に対してフィードバックをする、(3)文字数についての直前試行と比較したフィードバックを行う、の3点を含めたワープロ作文指導を行っています。すると8試行の指導前後で平均書字数が約200文字から約300文字と1.5倍に増加しただけでなく、1分間の書字入力速度も約19文字から24文字と上昇することなども示されました。

このように「読み」や「書き」を刺激-反応関係の観点から捉え、(1)正確性に関わるような刺激性制御の確立と、刺激等価性に基づく派生関係を想定した指導や、(2)刺激-反応関係や反応型そのものの流暢性に対する直接指導や、ワープロのような補助具を使った指導という2つの軸で支援することが、読み書きの学習の上で有効であることを明らかにするために研究を行っています。最近では、これらの読み書きに学習に伴う脳機能の変化をNIRSと呼ばれる赤外線を使用した脳機能計測の機器を用いて測定する

研究なども行っています。

ここで紹介した研究は全て、コンピュータで作成した教材を使って行われています。一部の研究では、それらの教材を家庭や特別支援学校に配信し、子どもの両親や子ども自身、子どもに関わる教員に運用してもらって実施しています。今後は、これらの教材をより多くの子どもに実施してもらうことで、その有効性の検討や追試を行っていくことを検討していますので、これを読んで興味を持たれた方がいましたら、ぜひご連絡いただければと思います。

引用文献

- Binder, C. (1996). Behavior fluency: Evolution of a new paradigm. *The Behavior Analyst*, **19**, 163-197.
- Johnson, K., & Layng, T. V. J. (1985). Breaking the structuralist barrier -Literacy and numeracy fluency-. *American Psychologist*, **47**, 1475-1490.
- Sidman, M. (2000). Equivalence relations and the reinforcement contingency. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, **74**, 127-146.
- 菅佐原洋 (2006, October). ワープロで「書い

て表現すること」を伸ばす — コンピュータリテラシーへの展開 —. 日本LD学会第15回大会自主シンポジウム, 北海道.

- 菅佐原洋・阿部美穂子・山本淳一 (2006). 脳性麻痺児における拗音の書字指導のためのコンピュータ支援教材の開発と評価. *特殊教育学研究*, **43**, 345-354.
- Sugasawara, H., & Yamamoto, J. (2007a). Computer-Based Teaching of Word Construction and Reading in Two Students with Developmental Disabilities. *Behavioral Interventions*, **22**, 263-277.
- Sugasawara, H., & Yamamoto, J. (2007b, May). Teaching fluency of word-processing skills in Japanese writing. Poster presented at 33rd Annual Convention of the Association for Behavior Analysis, San Diego.
- Sugasawara, H., & Yamamoto, J. (2008). Computer-Based Teaching of Kanji Construction and Writing in a Student with Developmental Disabilities. *Behavioral Interventions*.

事務局より — 未納会費のご請求について

事務局では、未納会費のご請求を12月中旬に行う予定でございます。該当される会員の皆様には、お知らせとともに未納分の振込票を郵送いたしますので、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

事務局・常任理事会の各委員会からの会員の皆様へのお知らせは、学会ホームページの他に、学会ブログ (<http://blog.j-aba.jp/>) においても随時掲載されております。是非、ご高覧くださいようお願い申し上げます。

編集後記
ニューズレター編集部

すっかり刊行が遅れ《秋号》とは名ばかり，年末の刊行になってしまいました。申し訳ございません。今回，都合により，海外からの連載は

掲載できませんでした。重ね重ねお詫び申し上げます。

ニュースレター編集部よりお願い

- ニュースレターには個人情報に記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析

学会ウェブサイトで公開いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359
帝京大学文学部心理学科内
日本行動分析学会ニュースレター
編集部 望月 要
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp